

カレーを表す中国語名称の変遷

田野村忠温

要旨：現代中国語（普通話）におけるカレーの名称である *gali*、「咖喱」は、コーヒーの名称と同じく、名称の歴史的な変遷の結果である。ここでは 19 世紀から 20 世紀初期にかけての資料の調査に基づいてカレーの名称の歴史を跡付ける。そこには、拙論(2020b)で考察したコーヒーの名称の歴史にはない複雑な事情として、意識から音訳への転換があった。

キーワード：curry gali 咖喱 外来語 意識 音訳

1 はじめに

筆者は先に中国語におけるコーヒーの名称の歴史について論じた（拙論(2020b)）。本稿では、中国語におけるカレーの名称の歴史を考察する。

現代中国語におけるコーヒーとカレーの名称は一般にそれぞれ「咖啡」「咖喱」と表記され、第 1 字「咖」が共通している——ただし、発音は *ka*、*ga* と異なる——。しかし、コーヒーの名称には確認できる初期の段階から一貫して音訳が使われていたのに対し、カレーの名称には当初意識が使われ、その後徐々に音訳に移行したと見られる。その意味において、両者の歴史は平行的ではなかった。¹

コーヒーの名称と異なり、カレーの名称については従来一部の外来語研究や外来語辞典でごく簡単に触れられているに過ぎない。黄編著(2020)は関連する用例を約 20 件挙げているが、最も早い用例が 1879 年のもので、ほかはすべて 20 世紀の用例である。しかし、以下で見る通り、カレーの名称には 19 世紀中葉に大きな変化があった。したがって、それ以後の用例の観察によってはカレーの名称の歴史を明らかにすることができない。ほかには特に言及すべき先行研究もないので、これより直ちに名称の歴史の考察に入る。

なお、論述に際し、漢字は引用の文脈も含めて原則として現代日本の字体による。

¹ 祝・趙(2019)は、先行研究に引用された『広東通志』巻九十五（1822 年）における「外洋有葡萄酒……又有黑酒，番鬼飯後飲之，云此酒可消食也。」（西洋人は食後に黒酒を飲む。黒酒は消化を助けると言う。）という記述に基づいて、コーヒーの名称に「黒酒」という意識語があったとしている。しかし、コーヒーを知らない人物による特定の記述中のみ見出される説明的表現を、社会的に共有されたコーヒーの名称と見なすことには無理がある。

2 カレーの諸名称の変遷

カレーの中国語名称は、まず意識語として始まり、その後意識語と音訳語との併用の時期を経て、最終的に音訳語「咖喱」になった。ここではその第3段階に至るまでの名称の状況を記述する。

資料からの引用は、見やすさのために、原則として「原語 中国語名称の漢字表記 中国語名称のローマ字表記」という形に統一し、原語の大文字は小文字に変えて示す。辞書の項目としてはほぼその形で書かれているものも多いが、項目の順序を入れ替えて引用するものや、句や文からカレーの名称だけを抽出して引用するものもある。カレーの中国語名称の漢字表記には下線を付す。下線は、意識語については波線、音訳語については直線とする。

2.1 意識による名称

19世紀に西洋人宣教師たちの出版した辞書や語学書にはしばしばカレーが現れる。それは当時の英米両国におけるカレーの流行を背景としているが(後述)、19世紀前半のその種の資料においてはカレーは一貫して「黄姜」という意識語によって表されていた。「黄姜」はターメリック(turmeric)、すなわち、ウコン(鬱金)、カレーの作成に使われる香辛料——と言うよりも、着色料——の名称である。

確かめることのできた、カレーを表す「黄姜」の最初の記録は、英華辞典 Robert Morrison *A Dictionary of the Chinese Language, Part III, English and Chinese* (1822年)に見られる。そこでは図1に見るように、馬の毛に櫛をかけることを表す同綴異義語の *curry* の見出し語のもとに *curry stuff* という表現が挙げられている。*hwang keang* は南京官話における発音を示している。

curry stuff 黄姜 *hwang keang*

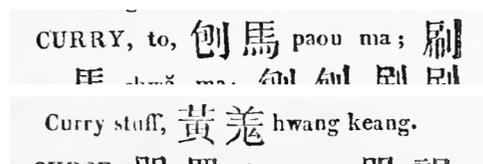


図1 カレーの意識名称初出—Morrison英華辞典(1822年)

curry stuff は次に見る Morrison の別の辞書では「黄姜材料」、「カレー材料」と訳されているが、現代人の考えるカレーの材料ではなく、カレーの調味料、すなわち、カレー粉の類を指す(拙論(2020a))。「姜」は「姜」(正字「薑」とは異なる字——民族名を表す「羌」の異体字——であるが、広東語での読みは共通である——現代の発音は *geung1*——。Morrison は次に見る辞書では「姜」を使っているのので、「羌」は単なる誤記と見なすことができる。ただし、「羌」は後の文献にもときおり現れるので、表記の混用が普及していたのかも知れない

広東語・英語辞典 Robert Morrison *Vocabulary of the Canton Dialect* 『広東省土話字彙』(1828年)

の Part II Chinese and English と Part III Chinese Words and Phrases にはカレーに関わるいくつもの項目がある。それらを出現順に示せば次の通りである。中国語名称のローマ字表記におけるハイフンの有無は同書に従う。

curry 黄姜 wong-keong
 turmeric 黄姜 wong-keong
 yellow keonged shrimps; i.e. shrimp curry 黄姜蝦 wong-keong-ha
 fowl curry 黄姜鶏 wong-keong-kei
 curry stuff 黄姜材料 wong-keong-tsoy-lew (以上 Part II)
 curry fowl 黄姜鶏 wong keong kei (Part III)

curry と turmeric の訳語が共通して「黄姜」であることから、特定の香辛料であるターメリックの名称がカレーの名称として転用されたということが分かる。

「黄姜蝦」、すなわち、“カレーエビ” が yellow keonged shrimps という中国語混じりの英語によって表されている——yellow keong という英語の動詞を作り出して使っている——ことが興味を引く。「黄姜鶏」が Part II では fowl curry、Part III では curry fowl と訳されているが、おそらく意図的に訳語を変えたわけではないであろう。

その後 19 世紀前半の西洋人宣教師による著作中に見出されるカレーの名称は『広東省土話字彙』に現れるものとほぼ同等で、新たに注目すべきものはない。広東語学習書 Elijah Coleman Bridgman *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect* (1841 年)、英華辞典 Samuel Wells Williams *An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect* 『英華韻府階階』(1844 年)、中国語文例集 Walter Henry Medhurst *Chinese Dialogues, Questions, and Familiar Sentences, Literally Rendered into English, With a View to Promote Commercial Intercourse* (1844 年)、英華辞典 Walter Henry Medhurst *English and Chinese Dictionary, Vol. I* (1847 年)、広東語学習書 Thomas T. Devan *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular), Prepared for the Use of the House-Keeper, Merchant, Physician, and Missionary* (1847 年) に現れるカレーの名称を次にまとめて挙げる。Bridgman(1841)で各音節に付された声調記号は印刷の都合上省いて引用する。

curry stuff 黄姜材料 wóng kéung ch'áu tsiú (Bridgman(1841))
 curry 黄姜 hwáng kiáng (Williams(1844))
 curry 黄姜 hwâng kēang (Medhurst(1844))
 curry-stuff 黄姜末 hwâng kēang mǒ (Medhurst(1847))
 turmeric or curry 黄姜 wóng kaung, curry fowl 黄姜鶏 wong kaung kei (Devan(1847))

この最後の Devan の広東語学習書においても、“turmeric or curry”という書き方から、ターメリ

ックとカレーが同じものであるかのように扱われていることが分かる。

なお、カレーの意識によるその他の名称としては、19世紀後半以後の資料に「薑」^薑「姜食」^{姜食}「黄醬」^{黄醬}などがあった。以下の引用の出所は英語・広東語辞典 John Chalmers *An English and Cantonese Pocket-Dictionary, For the Use of Those Who Wish to Learn the Spoken Language of Canton Province* 『英粵字典』(1859年)、英語学習書楊勳『英字指南』(1879年)、英華辞典 George Carter Stent *A Dictionary from English to Colloquial Mandarin Chinese, Partly Revised and Supplement Compiled by K. E. G. Hemeling* (1905年)である。

curry-stuff 薑 tsai (Chalmers(1859))

curry 姜食、curry stuff 姜料 (楊(1879))

curry-stuff 黄薑 huang²-chiang⁴、黄薑末 huang²-chiang⁴-mo⁴ (Stent(1905))

『漢語大詞典』第9巻(漢語大詞典出版社、1992年)は、「薑」の語義の1つを「作調味用的姜、蒜、葱、韭等菜的碎末。」(調味料として使う生姜、ニンニク、ネギ、ニラなどの野菜の碎末)と説明している。Chalmersの「薑」は、カレーが各種の香辛料の碎末——実際には粉末であるが——を調合したものだという事実に基づく表現であろう。

2.2 音訳による名称への移行

19世紀中葉からカレーは音訳語によっても呼ばれるようになる。以後、音訳語の推定による発音——声調は捨象する——にも下線を施す。普通話の ga li に一致するものは実線、それとは異なるものは破線とする。

確認できたその最初の事例は、鄭仁山『華英通語』(1849年)に見出される。『華英通語』は中国人によって編まれた最初期の正統な英語の学習書であり、複数ある版の最初の版が鄭仁山の著作による道光本である(拙論(2018))。² 同書の語彙集の「炮製門」(加熱調理門³)に図2のような項目がある。図中に見る片仮名は同書を使って英語を学んだ日本人による書き込みであり、目下の考察には関係しない。⁴

² 以下の『華英通語』に関わる記述は、日本語におけるカレーの名称の問題について述べた拙論(2020a)と重複するところがある。

³ 「炮」は“焼く”、“あぶる”などの調理法を表すが、「炮製門」は煮込んだりゆでたりする料理の名称も含んでいる。

⁴ 「架厘」の左にある「カネヒバシ」の書き込みはおそらく近くにある項目との混同による(拙論(2020a))。

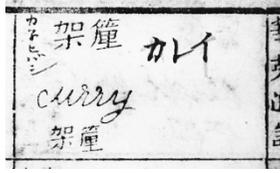


図2 カレーの音訳名称初出—鄭仁山『華英通語』(1849年)

項目の上部に書かれた「架厘」——「厘」は竹冠を加えた字形で書かれているが——が見出し語で、curry がその訳語として示されている。下部の「架厘」は curry の漢字による注音で、見出し語と一致している。これまでの事例にならった形で示せば次の通りである。

curry 架厘

同書は中国人のための英語学習書であるので「架厘」の読みのローマ字表記はないが、当の漢字2字と以下で見る他の資料における記述に基づいて総合的に考えて、ピンイン（漢語拼音）風には ga li ないし ga lei のように読まれたと考えられる。ここでは音訳語の発音の声調は省いて考える。

『華英通語』道光本に基づいて編まれた『華英通語』咸豊5年本（1855年）の語彙集の「炮製類」では次の漢字表記が使われている。ただし、実際には、「厘」は「尤」に似た形の略字体（拙論(2019)）で書かれている。発音は道光本の「架厘」と共通であろう。

curry 加厘

この「加厘」の各字に口偏を加えれば、現代中国語で一般に使われている「咖喱」の表記になる。

19世紀の後半には、「黄姜」とともに、音訳によるカレーの名称が広く使われるようになる。例えば、『華英通語』に類する英語学習書である唐廷枢『英語集全』（1862年）には次のように書かれている。「架喇」の発音も ga li ないし ga lei であろう。

curry 黄姜

curry beef 架喇牛肉、curry fowl 架喇鷄、curry fish 架喇魚、curry shrimps 架喇蝦

curry stuff 架喇材料

同書は英語の curry を「卡利」——「卡」の発音は ka——と注音している。このことは、「架喇」は英語の curry を注音したものではなく、ga li（ないし ga lei）がすでに音訳による外来語として成立していたことを示している。

英華辞典 Wilhelm Lobscheid *English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin*

Pronunciation 『英華字典』, Part I (1866 年) では「咖喱」という音訳が使われている。同書は中国語の訳語に関してその広東語と官話両様の発音を示しているが、次の引用中の「 ϕ 」は官話の発音の表示が欠けていることを示す。ここでも声調記号は省いて示す。⁵

curry powder 咖喱粉 *ká lí fan*, ϕ
 curry powder 黄姜粉 *wong kéung fan*, *hwáng kiáng fan*
 curry powder 黄姜末 *wong kéung mút*, *hwáng kiáng moh*
 curry-stuff 黄姜材料 *wong kéung ts'oi liú*, *hwáng kiáng ts'ai liáu*
 curry sauce 咖喱 *ká lí*, ϕ
 curry fowl 黄姜鷄 *wong kéung kai*, ϕ

同書は、有気音は子音字の後ろに「 \prime 」を加えて k' のように示している。したがって、音訳の「咖喱」の広東語での読みとして書かれた *ká lí* は *ga li* という発音を示していることになる。官話での発音が記されていないのが、単なる脱漏なのか、それとも、官話での発音が分からなかったことによるものなのかは不明である。

西洋料理の指南書 Tarleton Perry Crawford 夫人 *Foreign Cookery in Chinese* 『造洋飯書』(1866 年) も音訳語を使っている。レシピ中には「噶喇粉」という表現も現れる。同書は広東語を使っていない。

curry 噶喇

この「噶喇」の発音も *ga li* であろう。

英華辞典 Justus Doolittle *Vocabulary and Hand-Book of the Chinese Language, Romanized in the Mandarin Dialect* 『英華萃林韻府』, Vol. I (1872 年) におけるカレーの名称の記述は注目に値する。

curry stuff 架厘材料 *chia li tsai liao*

ここでは「架厘」という音訳語の発音が *chia li* として示されている。これはピンインの *jiá .li* に相当する。中国におけるコーヒーの名称は、筆者の推定によれば、広東語で作られた *ga fi* ないし *ga fei* という名称に始まり、それを表す「咖啡」などの漢字表記が南京では *gia fei*——[*kea*] ないし [*kia*] のような発音を *gia* と書く——、北京では *jia fei* とも読まれるようになり、それが 20 世紀になって *ka fei* に取って代わられた (拙論(2020b))。その変化の前半はカレーの名称にも共通し、広東語の *ga li* ないし *ga lei* を表す「架厘」その他の表記が北京で *jia li* とも読まれるよう

⁵ *curry powder* は実際には一度だけ書かれ、それに続けて「咖喱粉」「黄姜粉」「黄姜末」の 3 つの訳語が列挙されている。見やすさを考えて形式を調整して引用した。

になったものと推定される。

広東語の学習書 Nicholas Belfield Dennys *A Handbook of the Canton Vernacular of the Chinese Language. Being a Series of Introductory Lessons, For Domestic and Business Purposes* 『初学階』(1874年)には、図3に見るように現在最も一般的な「咖喱」の音訳表記が現れる。

curry 咖喱 ka li

curry fish 架喱魚 ka li ü

発音はローマ字表記から考えてやはり ga li であろう。

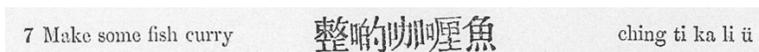


図3 「咖喱」初出—Dennys『初学階』(1874年)⁶

英華辞典 Ira M. Condit *English and Chinese Dictionary* 『英華字典』(1882)では「加李」、英語・アモイ方言辞典 John D. MacGowan *English and Chinese Dictionary of the Amoy Dialect* (1883年)では「加里」という表記が使われている。

curry 黄姜, 加李 (Condit(1882))

currystuff 加里料 ka-li-liäu (MacGowan(1883))

後者の ka-li の表す発音は ga li であろう。前者は「加李」という漢字表記だけでローマ字表記がないが、発音は ga li か ga lei のいずれかであろう。

英語・広東語辞典 James Dyer Ball *The Cantonese Made Easy Vocabulary; A Small Dictionary in English and Cantonese*, Third Edition (1908年)は「唻喱」という音訳を使っている。声調記号は省いて引用する。

curry 唻喱 ká-léi

curry-powder 唻喱材料 ká-léi ts'oi liú

この ká-léi の発音もおそらく ga li である。同著者による *Cantonese Made Easy*, Third Edition (1907年)は éi は Williams の í に相当すると説明しており、それはすなわち [i:] である。

英華辞典 George Carter Stent *A Dictionary from English to Colloquial Mandarin Chinese, Partly Revised and Supplement Compiled by K. E. G. Hemeling* (1905年)においても jia li の発音を確かめることができる。すでに2.1に挙げた意識語は省いて示す。

⁶ 文例中の広東字「啲」は“些”、“若干”を表す。

curry-stuff 架厘材料 chia⁴-li²-ts'ai²-liao⁴

英華辞典 Karl Hemeling *English-Chinese Dictionary of the Standard Chinese Spoken Language* (官話) and *Handbook for Translators, Including Scientific, Technical, Modern, and Documentary Terms* (1916 年) に見られる音訳によるカレーの名称は次の通りである。対比の必要上、コーヒーの名称を併せて示す。

curry 咖喇粉 ka (chia) li fèn

coffee 加非 k'a (chia) fei

ここでは「咖喇」に 2 通りの読みが記されている。同書では有気音は k' のように表されているので、ここでの ka は ga を表す。すなわち、示されている両様の発音は ga li と jia li である。chia を括弧に入れて示しているのはおそらくそれが古い発音だということであろう (拙論 (2020b))。「加非」についても同様に、ka fei が新しい発音、jia fei が古い発音として示されているものと考えられる。

コーヒーとカレーの音訳による名称に異なる発音の変化が生じた原因は残念ながら分からない。広東語の ga fei, ga li の第 1 音節を表す「加」「咖」などの字が北方で gia や jia と読まれるようになったが、その後英語の知識の普及とともに原語の発音との差を縮めるべく、コーヒーの名称においてはそれが ka に置き換えられた。他方、カレーの名称ではそれが ka にはならず、本来の広東語の発音に近い ga に戻った。両者の差が単なる偶然によるものなのか、何らかの事情を背景とするものなのか、今は不明である。

華英辞典 *Mathews' Chinese-English Dictionary, Revised American Edition* (1943 年) は「咖」を chia (=jia) の読みを持つ音訳字と説明して「咖啡」「咖喱」の 2 語を挙げ、“Also read k'a!” (k'a' と読まれる。) という注釈を加えている。これを額面通りに受け止めれば、カレーが ka li と呼ばれることもあったということになる。それはあっても自然なことであるが、ka li という読みを直接的に示した資料は見出せていない。

3 訳法変遷の論理

中国語におけるカレーの名称は「黄姜」という意識語に始まり、その後「咖喱」などの音訳語に移行した。この事実は何を意味するのであろうか。

元来インドの料理であるカレーの名称が 19 世紀の多くの英語に関わる語学書——すなわち、西洋人のための中国語辞典、学習書、および、中国人のための英語辞典、学習書——に頻繁に現れるのは、当時の英米両国におけるカレーの流行を背景としている (拙論 (2020a))。すなわち、遅くとも 18 世紀初頭までのインドで、香辛料の原料を挽いて調合する手間を省けるカレー粉の製造と英国への輸出が始まり、19 世紀中葉の英国では人々が“満足なディナーには必ず何らか

のカレー料理が要る”と思うほどになった。

3.1 意識の根拠

コーヒーは少なくとも 19 世紀初期から音訳によって表現されていたが、カレーにはなぜ当初意識が使われたのか。あえてその 2 つの飲食物だけの対比に基づいて想像を働かせれば、中国人にとってコーヒーは完全に外来のものであったのに対し、カレーは中国にもある香辛料や植物をも使って作られるものであった。したがって、カレーを名付けるために既存の語を使うことができた。

しかしそれにしても、カレーを作るのに使われる多種類の香辛料の中から、なぜ「黄姜」、すなわち、ターメリック、ウコンの名がカレーの名称として選ばれたのか。

当時の英国人はターメリックを多量に使う黄色に着色したカレーを好んだ。料理書 *James Jennings Two Thousand Five Hundred Practical Recipes in Family Cookery* (1837 年) はカレー粉の項目で、多数のレシピの確認に基づいて次のように述べている。

the first (=turmeric) appears to be a constant ingredient; but, except for imparting a yellow colour, we do not know its further use; its taste is sickening and disagreeable. (ターメリックはどのレシピにも含まれているが、着色以外の働きはない。その味は吐き気を催させる不快なものだ。)

また、家庭経済雑誌 *The Magazine of Domestic Economy*, Vol. 2 (1837 年) 所載の“Cookery”と題された記事は次のように述べている。ここではターメリックが *tumeric* と綴られている。⁷

Tumeric powder is here used to excess, and from it is derived that particularly nauseous taste of which all well-informed curry eaters complain. (英国のカレーにはターメリックが過剰に使われている。そのために吐き気を催す味を生じ、カレーをよく知る人は誰もそれを嫌う。)

こうしたことから考えて、外見上目立つ黄色のもとになっているターメリックが英国流のカレーを代表する特徴的な成分と見なされて「黄姜」という意識語が作られたのではないかと想像される。加えて、ターメリックは染料としても使われるものであり、また、中国において薬品としての使用はあってもそれが食品に使われることはなかった可能性がある。もしそうだとすれば、“通常食品に使うことのないターメリックを使った料理”ということでターメリックが中国人の注意を引きやすいという要素もあったかも知れない。

なお、史主編(2019)は、“中国のカレーはすでに中国化しており、ターメリックあるいは生姜粉を多く入れ、色は黄色がかり、味は軽い”と説明しているが、ターメリックの多用は上述の

⁷ *tumeric* という語形は *Oxford English Dictionary* 第 2 版(1989)の *turmeric* の項目には載っていないが、19 世紀の多数の資料中に見出される。

通り英国人の慣習に始まる。

3.2 音訳への移行の根拠

では、19世紀中葉から音訳によるカレーの名称が使われるようになったのはなぜか。それはやはりその時代背景に関わっていると考えられる。

音訳の名称を見出すことのできる早期の文献は『華英通語』道光本(1849年)であるが、同書はアヘン戦争後に本格化した西洋との貿易に従事する中国人のために編まれた英語学習書である。当時、西洋人の中国滞在者、居住者が年々増え、中国人が *curry* の語を聞く機会も増えたはずである。⁸ 加えて、「黄姜」は上述の通り、実のところカレーの外観に関わる成分の名称に過ぎず、カレーを適切に説明し得る名称になっていない。そうした事情の複合の結果として、カレーを原語 *curry* の音訳によって呼ぶようになったのではないかと想像される。

『華英通語』道光本でも『華英通語』咸豊5年本でもカレーの項目はそれぞれ西洋人宣教師の著した広東語学習書に基づいて書かれている。具体的にはそれぞれ、2.1で言及した *Devan* と *Bridgman* による広東語学習書である。いずれの学習書においてもカレーは「黄姜」と書かれており、『華英通語』各版の作者はそれを音訳語で置き換えたことになる(拙論(2020a))。利用された広東語学習書は『華英通語』に比べてさして古いものでもないが、宣教師たちの知るカレーの名称が現実にはすでに過去のものになりつつあったということではないかと思われる。

カレーの名称が最終的に音訳語に統一されるまでは、意識による名称と音訳による名称が併用されていたわけであるが、その時期の意識と音訳のあいだに明確な使い分けは見出しがたい。強いて言えば、調味料としてのカレーには意識と音訳が使われているが、確認できた事例の限りでは、*curry fowl*、*curry beef*、*curry fish* のような具体的な料理名にはもっぱら音訳が使われている。しかし、その事実から直ちに一定の使い分けがあったと推論することはできない。なぜならば、カレーに関わるさまざまな語句の中でも *curry* や *curry stuff* のような中核的なものについては、先行する出版物における意識語をやや時代遅れとは知りつつ書き加えたという可能性も考えられるからである。

4 おわりに

「咖」の字が「咖啡」では *ka* と読まれ、「咖喱」では *ga* と読まれるのはなぜかという素朴な疑問から出発し、拙論(2020b)ではコーヒーの名称、本稿ではカレーの名称についてその歴史的な展開の様相を確かめた。カレーの名称の歴史には、コーヒーの名称にはない意識から音訳への交替という局面があった。

当初の疑問である「咖啡」と「咖喱」における「咖」の読みの差の理由——考察の結果に基

⁸ やや時代は下るが1874年に出版された広東語学習書に、ビール、カレー、コーヒーなどを表す音訳の外来語が中国現地の使用人のあいだで通用していたことが書かれている(拙論(2020a))。

づいて言い換えれば、*jia fei* が *ka fei* に変わった一方で *jia li* は *ga li* に変わったことの原因——は未解決の問題として残る。現代の通俗的な英語指南書における漢字による注音では、英語の /k/ は確認の限りほぼ例外なく有気音として示されている。それを基準として言えば、「咖啡」の *ka* が原則に従っており、「咖喱」の *ga* が例外的である。とすれば、未解決の問題は、「咖」の発音が「咖喱」ではなぜ *ga* で定着したのかという問題として述べ直すことができる。

文献

- 田野村忠温(2018)「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜—附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』一」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 58 卷
- 田野村忠温(2019)「中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記—流音の知覚と表記—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 59 卷
- 田野村忠温(2020a)「福沢諭吉の『コルリ』(カレー)をめぐって」『阪大日本語研究』32 (大阪大学大学院文学研究科日本語学講座)
- 田野村忠温(2020b)「コーヒーを表す中国語名称の変遷」『或問』第 37 号
- 黄河清编著(2020)『近现代汉语辞源』(上海辞书出版社)
- 史有为主编(2019)『新华外来词词典』(商务印书馆)
- 祝雪・赵旭(2019)「试论外来词 *coffee* 的汉译特征」『沈阳大学学报(社会科学版)』2019 年第 2 期

近代東西言語文化接触研究会

本会は、16世紀以降の西洋文明の東漸とそれに伴う文化・言語の接触に関する研究を趣旨とし、具体的には次のような課題が含まれる。

- 1、西洋文明の伝来とそれに伴う言語接触の諸問題に関する研究
- 2、西洋の概念の東洋化と漢字文化圏における新語彙の交流と普及に関する研究
- 3、近代学術用語の成立・普及、およびその過程に関する研究
- 4、欧米人の中国語学研究（語法、語彙、音韻、文体、官話、方言研究等々）に関する考察
- 5、宣教師による文化教育事業の諸問題（例えば教育事業、出版事業、医療事業など）に関する研究
- 6、漢訳聖書等の翻訳に関する研究
- 7、その他の文化交流の諸問題（例えば、布教と近代文明の啓蒙、近代印刷術の導入とその影響など）に関する研究

本会は、当面以下のような活動を行う。

- | | |
|-----|--------------------------------------|
| 第1節 | 年3回程度の研究会 |
| 第2節 | 年2回の会誌『或問』の発行 |
| 第3節 | 語彙索引や影印等の資料集（『或問叢書』）の発行 |
| 第4節 | インターネットを通じての各種コーパス（資料庫）及び語彙検索サービスの提供 |
| 第5節 | (4)のための各種資料のデータベースの制作 |
| 第6節 | 内外研究者との積極的な学術交流 |

会員

本会の研究会に出席し、会誌『或問』を購読する人を会員と認める。

本会は、言語学、歴史学、科学史等諸分野の研究者の力を結集させ、学際的なアプローチを目指している。また研究会、会誌の発行によって若手の研究者に活躍の場を提供する。学問分野の垣根を越えての多くの参集を期待している。

本会は当面、事務局を下記に置き、諸事項に関する問い合わせも下記にて行う。

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35 関西大学文学部中国語中国文学科
内田慶市研究室 (Tel. ダイヤルイン 06-6368-0431)

E-mail: u_keiichi@mac.com

URL: <http://keiuchid.sakura.ne.jp>

代表世話人：内田慶市